
遊戯王 チェンジ・パラダイム～地平を越えて～

アブソル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王 チェンジ・パラダイム〜地平を越えて〜

【Nコード】

N3074Y

【作者名】

アブソル

【あらすじ】

ここはデュエルモンスターの精霊と人間が共存する世界。

一般人がデュエルモンスターの精霊との接触が可能になって早20年。

人々と精霊は、共に歩み、生活に溶け込んでいた。

主人公、天竜もまた友人たちと共に楽しき日々を過ごしていた。

だが、やがて崩れる均衡。

20年前の隠された真実に知らず知らずのうちに近づき、巻き込まれていく天竜達。

パラダイムシフト発生の中で、彼らは何を感じるのだろうか。

そして彼らの選択とは……。

第一話 ライトロード使い（前書き）

初めまして、アブソルです。」

遊戯王は初めてのジャンルなので、かなり不備があると思いますが、
そのところは目玉にみてやってください（笑）

第一話 ライトロード使い

朝の日差しが、白い校舎を包み込む。

木々の間を小鳥が囀り飛び回り、風が木の葉を揺らす。

ここは県内でも有数のマンモス高校で、総生徒数は10000人を超える程だ。

「今日もいい天気だな。絶好のデュエル日和だぜ、こりゃ」

足取りも軽く歩みを進める、一人の少年がいた。

少年は校門を潜り、すれ違うクラスメイトに片手を上げて挨拶しつつ、教室へと向かう。

1 - B組。

引き戸をガラガラと明け、後ろから2番目の席に座る。

授業中内職をしても気づかれない、生徒待望のポジションだ。

まあ、教卓の先生から見ればサボっているのぐらい一目瞭然なワケだが。

「テン、おはよう」

「おう、宮野。おはようさん」

可愛らしい声に呼ばれ、天竜は振り返る。

山上天竜。この少年の名だ。

両親が天を翔ける竜のような男になって欲しいと願い、名づけたよ
うだ。

まあ、正直な話名前が壮大すぎて少し重荷になっているところはあ
るが、自分でも気に入っている。

クラスメイトは主に「テン」と呼んでいる。

そして今、天竜に話しかけたのが静香だ。

宮野静香。

このクラスのアイドル的存在で、容姿端麗、成績優秀、デュエル腕
抜群と非の打ち所のない風紀委員長である。

あまりに高嶺の花なので、クラスの男子達に話しかけたくとも出来
ないという苦渋を強いているほどだ。

いるだけで他者を悶絶させる彼女はきつと罪人なのだろう。

彼女にその気がないだけに性質が悪いと思っっているのは天竜だけで
はないはずだ。

「テンがこんな朝早く登校してくるなんて珍しいわね。いつもは
遅刻寸前なのに」

「ああ、それはな。トラとデュエルをするって昨日約束したんだよ」

「そうゆうことじゃ。そやから、真面目な真面目な風紀委員長は俺らのデュエルでも観戦しとき」

静香と天竜が振り返ると、野球部のユニフォームに身を包んだ生徒が立っていた。

藪野武虎。通称トラちゃん。

野球部とデュエルモンスター部の両方に通う、関西弁なスポ魂野朗、と天竜が表しているクラスメートだ。

成績は天竜を越え、地中に行く。

どういうことになっているかは、言わずもがなだ。

天竜とは長い付き合いで、何かとライバル視してきたり、絡んできたりと暑苦しい。

「トラちゃんとテンがデュエル・・・なるほど、だから張り切ってるわけね・・・」

野球部の朝練を済ませて来たのだろう、まったく感心する。

「そうゆうことや！さあ、デュエルディスクを構えてデッキをセツトするんや！」

「そう焦るなよ、トラ。まずは」

天竜に勢いを折られたのが気に食わないのが、武虎が接近してくる。

「なんやねん、俺はもう準備万端なんやで！」

「汗臭いから着替える」

その一言に、武虎が一步引く。

「俺が着替えている内にデツキ調整でもしとくんやな」

「ちょっとトラちゃん、ここで着替えないでよ！恥ずかしくないの！？」

「何が恥ずかしいねん！見られて恥な体とちやうわ！」

「そついうことじゃない！！」

天竜はため息をついて机に突っ伏した。

今教室には俺達以外なくてよかつたと心からそう思う。まあ、静香が日直で早く登校していたのが計算外だったが……。

かなりデュエルする時間帯を早めに伝えておいて正解だった。

武虎の雑さは群を抜いている。

公衆の面前で、女子生徒がいるのに、そしてその女子がクラスのアイドルだったりするのに、着替えを始めてしまうような奴だ。

結局武虎がパンツに手をかけた時点で静香のビンタが炸裂し、半ケツのまま教室からたたき出されたのだった。

「さあて、邪魔もなくなった・・・デュエルや、テン」

左頬が真っ赤に腫れている武虎がデュエルディスクを構える。

「ああ・・・」

「「デュエル」」

天竜：LP8000

武虎：LP8000

「俺の先行、ドロー」

いい手札だ・・・。

ライコウにケルビム・・・サイクロンに死者蘇生か・・・。

「俺はモンスターをセット！カードを一枚伏せて、ターンエンドだ
！」

天竜：モンスター（セット）1体 カード伏せ1 手札4枚

さあてどうくるか・・・。

「なんや〜ライコウ臭がプンプンするでえ。俺のターン」

ん、どうした。動きが止まったぞ。

動きが止まるのも無理はない。

トラちゃんの手札。

トラップスタン2、収縮、奈落の落とし穴、次元幽閉。

なんやのこの手札!?

モンスターおらへんやないの!

手札を持つ手がプルプルと震える。

凄まじい手札事故だ。

「な・・・なんでこんなあ・・・」

《それはトラが昨日デッキを組んでいる時に、菓子を頬張りながら作業をしていたからだろう。その時の菓자에付着していた糖分が、スリーブに張り付きカード同士を接着させたのだな》

剣闘獣ガイザレスがトラの後ろから呆れたふうに浮かび上がる。

実はトラは・・・いや彼だけではなく、天竜も静香も・・・この世界の住人全てがデュエルモンスターの精霊が見え、彼らと会話も生活も出来るのだ。

実のところ、デュエルモンスターの精霊が世界中の人々に見えるようになったのは、天竜達が生まれる直前だったというが・・・こ

の話はまた今度にしよう。

「ぐう・・・デッキよ、俺の力を！俺のターンドロージャ」

《菓子を貪りながらデッキを組む奴が、よく抜け抜けと協力を仰げるものだ》

ガイザレスがため息をつくが、トラちゃんは懲りない。

「おおー来たで！俺は手札抹殺を発動や！」

手札抹殺

通常魔法（制限カード）

お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

手札抹殺・・・互いの手札を総入れ替えするカードだ。

・・・奈落の落とし穴ぐらい伏せるといいたいが、生憎武虎はそこまで頭が回るタイプではなかった。

「ち・・・」

伏せたのはサイクロン。死者蘇生とケルビムが墓地送りか・・・墓地に落ちていいカードがねえな。

「おっしや！俺は手札から魔法カード、シールドクラッシュユ発動や！」

「な・・・シールドクラッシュユ!？」

シールドクラッシュユ

通常魔法

フィールド上に守備表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

まさかトラの剣闘獣デッキになんでそんな限定的な除去が・・・。

シールドクラッシュユの効果がライコウを貫く。

裏側表示のまま破壊されたので、カード破壊効果と墓地肥やしは使用不能だ。

「どうや、テン。初手でライコウセットはライロの基本やもんなあ！俺はそのための対策カードを準備しとったんやで！」

《・・・そこまで読んでいて何故『抹殺の使徒』じゃないのかが謎だな》

「自分ちよつと黙つとき！シールドクラッシュユなら守備表示の裁きの龍を破壊できるやろ！」

いや裁きの龍を守備で出すとかどんだけだよ・・・。

「続いて俺は手札から、剣闘獣エクイテを召喚や！メインフェイズ1終了、バトルフェイズに移行するでえ！」

剣闘獣エクイテ

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1600 / 守1200

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、

自分の墓地から「剣闘獣」と名のついたカード1枚を選択し手札に加える。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、

デッキから「剣闘獣エクイテ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

スタンバイフェイズをすっ飛ばしたような気がするが・・・まあいい。

「ダイレクトアタック！」

天竜：LP8000 6400

「そしてこのバトルフェイズ終了時、こいつをデッキに戻して、デッキから新たな剣闘獣ラクエルを特殊召喚するでええ！」

剣闘獣ラクエル

効果モンスター

星4 / 炎属性 / 獣戦士族 / 攻1800 / 守400

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した場合、このカードの元々の攻撃力は2100になる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードをデッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ラクエル」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

武虎が見事なショットガンシャッフルを披露し、デッキから『剣闘獣ラクエル』を特殊召喚してきた。

「ラクエルの攻撃力は剣闘獣の効果で特殊召喚したことによって1800から2100にパワーアップや」

剣闘獣ラクエル 攻撃力1800 2100

「メインフェイズ2にカードを2枚伏せて、ターンエンドや！」

武虎：LP8000 剣闘獣ラクエル 伏せカード2枚 手札1枚

(トラの伏せカード・・・恐らくは『剣闘獣の戦車』1枚と・・・何かだ。今のうちに、潰す!」

「お前のエンドフェイズ時、俺は速攻魔法サイクロンを発動」

サイクロン

速攻魔法

フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。

(さて・・・どっちにするか・・・)

「右のカードを破壊する」

サイクロンで抹消されたのは・・・そう、カウンター罠『剣闘獣の戦車』だ。

「やりおつたな・・・自分」

「ふっ。俺のターン。ドロー」

《天竜。俺を召喚しろ!俺なら奴と相打ち出来る・・・剣闘獣を封じなきゃやべえぞ!》

「・・・無理な注文をしないでくれ、ウォルフ」

このカードは通常召喚できないの一文を持ったウォルフが俺に任せろ!と胸を張る。

そんな彼を無視して、天竜は思考を巡らせていく・・・。

「さてと。どうすつかな」

天竜はデュエルディスクの対戦者の墓地情報データ画面を確認する。

手札抹殺、収縮、奈落の落とし穴、幽閉、トラップスタン2枚か・。

奈落が1枚落ちていているのなら、ここは後ろで黙想しているライトロードパラディン、ジェインでいくか・・・

奈落で乙ると、次のターンがヤバイが・・・何せアイツのデッキは魔法・畏除去と無力化に長けている・・・。

下手をすればガイザレスが飛んできかねない・・・。

だが、ここは攻める！

「スタンバイフェイズからメインフェイズ1に移行。俺は手札からライトロード・パラディン ジェインを召喚！」

《私の出番だな・・・》

ライトロード・パラディン ジェイン

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1800 / 守1200

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、

ダメージステップの間攻撃力が300ポイントアップする。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを2枚墓

地に送る。

「来よつたな！」

だが、トラは何も反応を起こしてこなかった。

召喚反応系じゃない・・・なら！

「俺は手札から魔法カード、光の援軍を発動！デッキの上から3枚のカードを墓地に送り、デッキからライトロードと名のつくレベル4以下のモンスター1体を手札に加える」

光の援軍

通常魔法（制限カード）

自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送って発動する。

自分のデッキからレベル4以下の「ライトロード」と

名のついたモンスター1体を手札に加える。

墓地に落ちたのは・・・

オネスト、ソーラーエクステンジ、ライトロードビーストウォルフ

来た・・・！

少し解説しておく、この世界のデュエルモンスターズの精霊達は複数の同名カードにも1つの人格として宿っている。

まあ、使い手によって人格もかなり変化するため、人類という枠の中で人間が別々の人となりであるのと同じだと思ってもらえればいい。

「ライトロード・ビースト、ウォルフを特殊召喚！そしてデッキからライトロード・マジシャン ライラを手札に加える」

ライトロード・ビースト ウォルフ

効果モンスター

星4 / 光属性 / 獣戦士族 / 攻2100 / 守 300

このカードは通常召喚できない。

このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「回り出したみたいやな」

「バトルフェイズだ。行け、ジェイン！剣闘獣ラクエルに攻撃！ジェインは相手モンスターを攻撃するとき、ダメージステップ時に攻撃力が300ポイントアップする」

ジェインの放った剣撃が、ラクエルを切り裂いた。

が、同時にラクエルもジェインに反撃し、2体のモンスターは相打ちとなった。

「ウォルフでダイレクトアタックだ」

「くそ・・・」

武虎：LP8000 5900

「メインフェイズ2。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

天竜：LP6400 ジェイン 伏せ2 手札2

「エンドフェイズ。デッキの上からジェインの効果でカードを2枚墓地へ送る」

墓地に行つて欲しいカードが落ちない・・・運が悪いな。

「やりよるなあ・・・じゃあ仕返しや。エンドフェイズにサイクロン発動や。対象は左のカード!」

「な・・・お前もかよ」

武虎の放つたサイクロンは、カウンター罠 神の警告を破壊した。

「ちっ。運がいいな」

「運も実力の内やで・・・俺のターン、ドローや」

（見せたるで、俺の剣闘獣デッキが他の奴らのそれとは一線を画してらってことをな）

「俺は手札から、フィールド魔法、『剣闘獣の戦場 ウォリアーズフィールド』発動や」

「そのカードは・・・！」

剣闘獣の戦場 ウォリアーズフィールド

フィールド魔法

1ターン1度、自分のメインフェイズに発動する事が出来る。

ライフを1000ポイント支払うことでデッキの中から「剣闘獣」と名のついたレベル4以下のモンスターを1体手札に加えることが出来る。

また「剣闘獣」と名のついたモンスターがフィールド上に表側表示で存在する場合、1体につきライフを800ポイント支払うことで相手はダメージステップ終了時まで魔法・罫カードを発動できない。デッキからモンスターが特殊召喚される度に、このカードにカウンターを1つ置く。

このカードがカード効果で破壊される場合、代わりにカウンターを1つ取り除く事が出来る。

またこの効果を適用したターン、このカードはカード効果では破壊されない。

武虎自慢のレアカードだ。単体で毎ターンアドバンテージを稼ぎ、かつ戦闘補助までこなせる。

彼の【剣闘獣】の強さは、このカードに依存している面があるが・・。

だが2つの効果を毎ターン適用していけば、ライフコストは重くプレイヤーに押し掛かることになる。

まさに諸刃の剣・・彼らしいカードだ。

「俺はライフを1000ポイント支払って、剣闘獣ラニスタを手札に加えるで!」

武虎 LP5900 4900

(さてとまずはあの厄介なムキムキ狼をなんとかせえへんとな。・・
・俺の伏せカードはゴッドバード・アタックや。ラニスタから伏せとウォルフを破壊できれば・・怖いのは裁きの龍・・超珍しいレアで、天竜のデッキには1枚しかはいつとらんが墓地にも無い・・)
フィールドのから空きだけは何としても避けたいところだ。

ライトロード相手に今のライフをさらけ出せば、待っているのは敗北のみだ。

いや、あるやん。

手は十分に・・・。

「俺は剣闘獣ラニスタを召喚や!」

剣闘獣ラニスタ

効果モンスター

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1800 / 守1200

このカードが「剣闘獣」と名のついた

モンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、

自分の墓地に存在する「剣闘獣」と名のついた

モンスター1体を選択して発動することができる。

選択したモンスターをゲームから除外し、

エンドフェイズ時までそのモンスターと同名カードとして扱う。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、

デッキから「剣闘獣ラニスタ」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「・・・そいつか」

「メインフェイズ1を続けるで。剣闘獣の戦場 ウォリアーズフィールドの効果発動。剣闘獣1体につき800ライフを支払って、相手のダメージステップ終了時までの魔法・罠カードの発動を封殺するでえ！」

武虎 LP4900 4100

(ミラーフォースを封じられた・・・)

「バトル！ラニスタで、ウォフルを攻撃！そして、ダメージステップに速攻魔法収縮を発動するで！」

ライトロード・ビースト ウォルフ 攻撃力2100 1050

天竜：LP6400 5650

「バトルフェイズ終了時、ラニスタをデッキに戻し、剣闘獣エクイテを特殊召喚や！そして『剣闘獣の戦場』にカウンターを1つ置くで。そして・・・エクイテのモンスター効果発動や！こいつが剣闘獣の効果で特殊召喚したとき、自分の墓地から剣闘獣を1体回収できるんや

《俺様に任せな、トラ！》

「ラクエルを手札に戻すで」

「メイン2や。まあ手札にモンスターしかないし、エンドや」

武虎

LP4100 手札1 エクイテ フィールド魔法「剣闘獣の戦場
ウォリアーズフィールド」
伏せ1枚

(くそ・・・トラの剣闘獣が回り始めた。こりゃさっさと対処しないとやばいぞ)

「俺のターン、ドロー」

《そろそろ・・・ボクの出番だよな？ボクがフィールドを一掃してあげようか？》

その時子供っぽい声が聞こえた。

そう、ドローカードは俺の切り札・・・裁きの龍だ。

だが、ここで安易に召喚して罾に引っかかってしまえば目も当てられない。

慎重に行くべきだ。

「ライラ、行けるか」

《勿論よ》

あの伏せ・・・奈落とは考えにくい。

激流葬はアイツのデッキには入っていない。

トラの癖・・・ゴッドバードアタックを即伏せたがる悪い癖だ。

あの余裕・・・エクイテを何時でも生贄に2枚除去できるといふ状況からくるものだろう。

俺の伏せと、これから召喚するであろうカードに対して、いつでも除去を打てる確信だ。

「スタンバイからメイン1。俺は手札からライトロード・マジシャンライラを召喚！」

「ライラやと・・・あ、光の援軍か・・・」

「さ、召喚したがチエーンするか？」

(ライラの攻撃力は1700・・・エクイテは1600。テンの手札は2。あの2枚のカードが逆転1手であることは考えにくいわ。・・・どうせ俺の次のターン『剣闘獣の戦場』を起動すればアドは稼げる。それに戦闘に入ればゴッドバードを打たざる得なくなるんや。だったら・・・)

「畏カード、『ゴッドバード・アタック』を発動！エクイテをリリースして、テンの場のライラと伏せを破壊や！」

《きゃあああ！》

ライラと伏せカードが破壊される。

「かかったな！」

「え・・・」

「お前がせっかちなのは知ってたからな。利用させてもらった」

悪い笑みを浮かべる天竜。

「まさか・・・」

「今お前がライラを除去してくれたお陰で、俺は安全にコイツを出せる。俺の墓地にはライラ、ジエイン、ウォルフ、ライコウ、ケル

ビムの5種類のライトロードが埋葬されている。大いなる龍よ、今ここに光の力を束ね、無慈悲な裁きを下せ！現れる、『裁きの龍』」
純白の龍が、その姿を現す。

天竜の切り札の1つ。裁きの龍だ。

1000ライフをコストに、フィールド上のカードを一掃するといふ凄まじい能力を持っている。

が、この世界では保有するものは極少数のカードであり、天竜が父親から継いだ大切なお守りでもある。

何故天竜達が朝早く、誰も登校してきていない時間帯にデュエルをしているのか分かるだろう。

希少なカードを持っている事を知られば、面倒事に合うのは必至。

そんなこと、天竜はゴメンだった。

このライトロードのデッキは彼が心を込めて作り上げたデッキであり、『裁きの龍』は父の思い出の詰まった宝物なのだから。

静香や武虎はこのカードを天竜が所有している事を知っている数少ない人物だ。

信用できるからこそ知らせているとも言える。

「お前の場はがら空きだな。……剣闘獣の戦場は破壊される時にカウンターを剥がすことでその破壊を無効にして、そのターン破

壊されなくなる。なら、当然・狙いは1つだ」

《久々に外に出られたよ！ずっとデッキの中だったもんね》

裁きの龍がうんつと伸びをする。

・・・その巨体と威厳からは想像もつかない程声は子供っぽく、中身もやっぱり子供だ。

「裁きの龍、トラを焼きトラにしてやれ。バトルフェイズに移り、裁きの龍でプレイヤーを直接攻撃！」

《はい。パニッシュメントレイ！》

「ぐう・・・」

武虎LP4100 1100

「メインフェイズ2。カードは伏せずに、ターンエンドだ。エンドフェイズに裁きの龍の効果でデッキの上からカードを4枚墓地へ送る」

ライコウ、サイクロン、大嵐、ウォルフ・・・。

「来た・・・ウォルフのモンスター効果発動。デッキから墓地に直送された場合、特殊召喚できる」

天竜：LP5650

裁きの龍 ライトロードビースト・ウォルフ 手札1 伏せ無し

「俺の・・・ターン。ドローや」

ドローカードは休息する剣闘獣だ。

（俺の手札にはラクエル・・・。守備で出しても次のターン一掃されたら終わりや。なら・・・）

「メインフェイズに『剣闘獣の戦場』の効果発動や！1000ライフを支払ってデッキからレベル4以下の剣闘獣1体を手札に加えるで」

武虎：LP1100 100

「俺は剣闘獣セクトルを手札に加え、手札から魔法カード発動や！

『休息する剣闘獣』！」

あれは・・・手札から剣闘獣2体をデッキに戻して、その後カードを3枚ドローする魔法・・・。

トラのライフは100・・・手札3枚から逆転できるか・・・。

「カードドローや！」

（来た・・・来たでえ！）

表情が一変したのを、天竜は感じ取った。

「俺は手札からE・HEROプリズマーを召喚や！」

E・HEROプリズマー

効果モンスター

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1700 / 守1100

自分のエクストラデッキに存在する融合モンスター1体を相手に見せ、

そのモンスターにカード名が記されている融合素材モンスター1体を自分のデッキから墓地へ送って発動する。

このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。

この効果は1ターンに1度しか使用できない。

アイツは・・・そうか引き当てやがったか！

トラがクラスのE・HERO使いにしつこく強請った結果、交換してもらったカードのはずだ。

デッキに1枚しか入れていないカードをこのタイミングで引くとは・・・。

悪運が強いというか、デッキに愛されているというか・・・。

「俺はプリズマーの効果を発動！効果で剣闘獣ガイザレスを見せるで！」

エクストラデッキからガイザレスを抜き取り、ひらひらと俺に提示する。

「そしてガイザレスに記されている融合素材モンスター1体を墓地に送って、同名カードとしてプリズマーを扱ってえ。俺は剣闘獣ベストロウリイを墓地に送り、プリズマーをベストロウリイ扱いや」

「・・・来るのか！」

「そして、ベストロウリイが場に存在することで手札からスレイブタイガーを特殊召喚！」

スレイブタイガー

効果モンスター

星3/地属性/獣族/攻 600/守 300

自分フィールド上に「剣闘獣」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

このカードをリリースする事で、自分フィールド上に表側表示で存在する

「剣闘獣」と名のついたモンスター1体をデッキに戻し、

自分のデッキから「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

このカードの効果で特殊召喚したモンスターは「剣闘獣」と名のついたモンスターの

効果で特殊召喚した扱いとなる。

「この流れは・・・」

そう、トラ得意の黄金パターン。

「スレイブタイガーのモンスター効果発動や！コイツをリリースして、場の剣闘獣ベストロウリイ扱いのプリズマーをデッキに戻して、デッキから剣闘獣1体を剣闘獣の効果で特殊召喚した扱いとして、場に出せるで。現れてえな、剣闘獣ダリウス」

《トラ・・・私に任せるがいい》

剣闘獣ダリウス

効果モンスター

星4/地属性/獣戦士族/攻1700/守 300

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時

自分の墓地から「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、

このカードがフィールド上から離れた時自分のデッキに戻す。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時にこのカードをデッキに戻す事で、

デッキから「剣闘獣ダリウス」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

「ダリウス・・・」

「まだまだ続くでえ！剣闘獣ダリウスの効果発動！コイツが剣闘獣の効果で特殊召喚した時、墓地の剣闘獣1体を効果を無効にして特殊召喚や。呼び出すのは勿論、剣闘獣ベストロウリイ！」

ベストロウリイが墓地より復活する。

剣闘獣ベストロウリイ

効果モンスター（制限カード）

星4 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻1500 / 守 800

このカードが「剣闘獣」と名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、フィールド上の魔法または罫カード1枚を破壊する。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードをデッキに戻す事で、デッキから

「剣闘獣ベストロウリイ」以外の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「そして、ダリウスとベストロウリイをデッキに戻して、エクストラデッキから剣闘獣ガイザレスを特殊召喚や！」

剣闘獣ガイザレス

融合・効果モンスター

星6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻2400 / 守1500

「剣闘獣ベストロウリイ」 + 「剣闘獣」と名のついたモンスター

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードが特殊召喚に成功した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する事ができる。

このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に

このカードを融合デッキに戻す事で、デッキから「剣闘獣ベストロウリイ」以外の

「剣闘獣」と名のついたモンスター2体を自分フィールド上に特殊召喚する。

《ふん・・・やっと私を呼び出したか。お前の下手なプレイングのせいで、我々の戦力は既に疲弊している。この責任は勝利で埋めてもらおうか》

「ガイザレス、その小言癖なんかならへんの？根暗な性格直さんと嫌われんで」

《……馬鹿に言われても何も感じんな》

「……まあええわ。ガイザレスの効果発動や！このカードが特殊召喚した時、フィールド上のカードを2枚まで破壊する事が出来るんや！」

《さてと、少し暴れさせてもらっぞ》

「タイラントストーム！」

ガイザレスの破壊効果が裁きの龍と伏せカードが吹き飛ばしその能力を遺憾なく発揮する。

「そして、テンにダイレクトアタックや！」

天竜：LP5650 3250

「やるじゃねえか」

「へへん、どうや。ガイザレスの一撃は強烈やる！バトルフェイズ終了時に俺はデッキから剣闘獣ラクエル、ダリウスをそれぞれ守備表示で特殊召喚や。メイン2にカードを1枚伏せて、ターンエンドやな」

武虎：LP100

剣闘獣ラクエル 剣闘獣ダリウス（共に守備表示） 伏せ1枚 手札0

（一気に形勢逆転かよ。まったくこれだからトラのデッキは苦手だぜ）

裁きの龍とウォルフを失い、窮地に追い込まれる天竜。

（俺の手札には通常召喚できない、ウォフル・・・だけか・・・）

「俺のターン、ドロー」

引いたカードはソーラー・エクステンジ。

まずはソーラーエクステンジで手札補充と行くか。

「メイン1。俺は手札から魔法カード、ソーラーエクステンジを発動する。手札のライトロードピーストウォルフを墓地に捨てて、カードを2枚ドロー。その後デッキからカードを2枚墓地に捨てる。」

ソーラー・エクステンジ

通常魔法

手札から「ライトロード」と名のついたモンスターカード1枚を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る。

引いたカードはサイクロン、そして死者転生だ。

今この場で死者転生をサイクロンを捨てて発動し、裁きの龍を出せば俺の勝ちは確定する。

だが・・・トラも当然それは読んでいるはず。

墓地情報を確認すると、先程のソーラーエクステンジでネクロ・ガードナーが墓地に送られているのが分かった。

よし、これで・・・凌げれば。

「メイン2にカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

天竜；LP3250 フィールド 伏せ1枚 手札1枚

「俺のターン、ドローや・・・。一気にケリをつけるで。俺は手札から魔法カード剣闘獣訓練所を発動！」

剣闘獣訓練所

通常魔法

自分のデッキからレベル4以下の「剣闘獣」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「手札に加えるのは当然、剣闘獣ベストロウリヤ。ほいで、そのままコイツを召喚や」

「・・・」

「ベストロウリヤとダリウスで、ガイザレスを融合召喚や。そして、ガイザレスの効果発動！フィールド上のカードを2枚まで破壊できる！タイラントストーム！」

「甘い！速攻魔法発動！サイクロン！」

ガイザレスの効果にチェーンされ、サイクロンが発動された。

武虎が伏せていた「剣闘獣の戦車」が為すすべも無く破壊されてしまう。

「・・・やるやんけ」

サイクロンを墓地に入れ、悔しそうに歯軋りする武虎。

「でも、これで終いや。ガイザレスでダイレクトアタック！」

「まだまだ！墓地のネクロ・ガードナーを墓地から除外し、ガイザレスの攻撃を無力化する」

「落ちとつたんか・・・まあええわ。攻撃力2100のラクエルでダイレクトアタック！」

「・・・っ」

天竜：LP3250 1150

「バトルフェイズ終了時に俺はガイザレスとラクエルをデッキに戻して、剣闘獣を特殊召喚するぞ。どないしよかな・・・よし、ガイザレスの効果で、剣闘獣ラクエルとムルミロを特殊召喚、ラクエルの効果で呼び出すんは剣闘獣ベストロウリヤ！」

3体のモンスターがフィールドに居並ぶ光景は圧巻だ。

「そしてメインフェイズ2にラクエルと剣闘獣と名のついたモンスター2体を融合素材として、エクストラデッキから剣闘獣ヘラクレイノスを特殊召喚するぞえ！」

剣闘獣ヘラクレイノス

融合・効果モンスター

星8 / 炎属性 / 獣戦士族 / 攻3000 / 守2800

「剣闘獣ラクエル」 + 「剣闘獣」と名のついたモンスター×2

自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、

融合デッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは必要としない）。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、手札を1枚捨てる事で魔法または罫カードの発動を無効にし、それを破壊する。

ターンエンド、の宣言に天竜の顔が綻ぶ。

武虎：LP100 剣闘獣ヘラクレイノス 手札0 伏せ0

「な・・・何がおかしいんや？」

「いや、トラとのデュエルは楽しいって改めて分かったんだよ。こんなに追い詰められるとはな・・・俺のターン！」

楽しい時間は矢のように早く過ぎてしまうものだ・・・。

「剣闘獣ヘラクレイノスの効果は、確か手札が無いと使えないよな？」

このデュエル、トラに後1000ライフが残ってれば俺の敗北だっただろう。

後1000ポイントあれば、トラは「剣闘獣の戦場」の効果でデッキから手札コストを補充できたはずだ。

そして、その事を今一番分かっているのは、他ならぬ武虎自身である、ということも天竜は知っていた。

「・・・自分の手札・・・死者転生・・・やな？」

唇をかんで、武虎が搾り出すような声を出す。

大して天竜は・・・

「当たり前だ」

極上の笑みを浮かべた。

「俺は手札のライトロード・ハンターライコウをコストに死者転生を発動！手札に加えるのは当然、裁きの龍だ！」

「自分って普段は無愛想やけど・・・」

「俺は手札から裁きの龍を特殊召喚する！」

裁きの龍

効果モンスター

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2600

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に「ライトロード」と名のついた

モンスターが4種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。

1000ライフポイントを払う事で、
このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを4枚墓
地へ送る。

「こういつ時って本当に」

「そして1000ライフを払って効果発動、フィールド上の全ての
カードを一掃する！」

天竜：LP1150 150

《いつくぞ〜ジャツジメント・シャイン!》

剣闘獣ヘラクレイノスが、光に包まれ跡形も無く吹き飛ぶ。

「そして、ダイレクトアタックだ」

「満面の笑みやなああああああ！」

武虎：LP1000

「ふいお」

最後に突っ込みを入れて散っていった武虎は、その場に崩れ落ちる。
そして盛大に机の角に弁慶の泣き所をぶつけ、目に涙を浮かべてい
る。。。。

「うう・・負けた」

《盛大な負けっぷりだな、トラ》

雨上がりの地面のようなジトジトした目で、ガイザレスがトラを見下している。

「ガイザレス・・すまへんな。負けてしもつたわ」

《何、気にすることは無い。最初から分かっていたことだ》

錆びた刀のような一言が武虎を刺し貫く。

天竜は何も言わずさっさとデスクを戻して、席に着いた。

彼らのやり取りは見ていて面白い。

それから暫らくして、生徒たちがぞろぞろと教室に集まり出した。

天竜は机の下でデッキ調整を、静香は1時間目の授業の予習、武虎は机に突っ伏して寝ていた。

チャイムの音と共に担任の先生が教室に入ってくる。

30代で独身、ルックスは普通な河田先生だ。

数学を教えており、やる気のなさげな喋り方に反して生徒を信頼するという方針を貫いている。

生徒からの人気が結構ある、不思議な先生である。

「え、今日はホームルームの前に転校生を紹介しておく」

・・・転校生？

「入っていいぞ」

扉を開け、入ってきたのは一人の少年だ。

背は小さい方で、色白で少し落ち着きなさげに教室を見回している。

「始めまして、芝 闇夜です」

闇夜と書いて「あんや」と読むらしい・・・随分とまあ暗い名前だな。

「前の高校では夜と呼ばれていました」

夜・・・アンヤでいいか。

「じゃあ芝、お前はそうだな・・・天竜の隣の席が空いているから、そこに」

静かに闇夜が移動し、机の上に鞆をドサツと置く。

そしてこちらをチラリと見ると、薄っすらと微笑んだ。

「よろしく。君は・・・」

「俺の名前は山上天竜。クラスの奴らは“テン”って呼んでるけど、好きにしてくれて構わないぜ」

「そう・・・」

どう呼ぼうか逡巡しているような素振りを見せていた闇夜だが、何も言わずに俯いてしまった。

「さてと、皆分かってるかと思うが、今日は生徒待望のデュエル実習だ。10班に4人ずつ分かれて、机を寄せ合ってくれ」

皆が顔をほころばせながらガタガタと音を立てて移動する。

この世界ではデュエルモンスターズは正式な教育科目に指定されて、小学校から大学まで基礎科目としてデュエル実習や理論を学ぶのだ。

緊張とどうすればいいのか分からない表情で立ち尽くす闇夜に天竜は声をかける。

「俺と一緒に班に入らないか？転校してきたばっかで、不安だろうし・・・席が隣になったのも何かの縁だ」

「いいの？」

「良いに決まってるでしょ」

後ろから天竜と仲の良い静香、そして武虎が近寄ってくる。

「ああ。丁度1人を探していたところだし」

「自分が転校生やな？俺は藪野武虎、それでこっちの口うるさいのが静香御前や」

「トラちゃん、どの口がそんなこと言うのかな」

武虎の頬をギュウっと引つ張る静香。

「痛たたた・・・ホントの事言つて何が悪いんや！」

「私は清楚が売りなのよ。空っぽの頭じゃ私の美点を理解できないくせに、何がホントのことよー！」

「自分で清楚とか言うとする時点でメッキ剥がれとるがな！」

二人の漫才に天竜は眉根を揉み、闇夜はどう反応していいのか分からないようだった。

結局席を寄せ合つて向かい合うことになった天竜達。

「で、自分、デッキは持つてきてるん？」

「デッキ・・・うん、一応」

真っ黒のスリーブに入れられた山札を机に出す闇夜。

名前と一緒にスリーブまで暗いな。

「ここのデュエル実習はな、10班の内毎週1人ずつ合計10人が選ばれてデュエルするんや。で、10人が戦つて5人に絞られるん

「やけど、その5人は成績に加点が付けられるんや〜」

「4人班ってことは・・・1ヶ月で1人が班から選ばれるの？」

「そういうことになるわね。私達の班の1人がこの学校から別の高校に移って、どうしようか悩んでいたんだけど・・・丁度いいタイミングで転校して来てくれたわね」

「でも僕弱いし初めてで・・・」

「ああそうだ。山上の班は一度芝とデュエルしておいてくれ。クラスの皆に対する彼の紹介代わりにはいいだろう」

自己紹介するならデュエルで。

デュエルすれば、相手のタイプや特徴が自ずと見えてくる。

そついう先生の考えが天竜が大好きだった。

「・・・じゃあ誰にする？」

「静香はどうだ？」

「私？ごめん、今日すっかり家にデッキを忘れちゃったのよ。今日は班でも出る番じゃ無かったし」

「そつか・・・なら・・・俺が行こうか？」

「お・・・天竜直々の出陣か？」

河田先生が腕を組んで面白そうな表情で成り行きを見守っている。

「デュエルディスクは俺が貸したるわ」

闇夜は武虎からデュエルディスクを受け取る。

「ちあ、やるうぜ」

「・・・よろしくね・・・」

第二話 VS 闇夜 こだわりのデュエル

転校生、芝闇夜とデュエルすることになった天竜。

「じゃあ僕から行くね。ドロー・・・スタンバイからメインフェイズ1に移るよ」

クラス中の注目を浴びて、天竜は内心ウキウキしていた。

目立つのは嫌いじゃない、というか実は目立ちたがり屋な所もある。

本当は注目を集めているのは闇夜なのだが・・・。

だが、天竜には勝てる自信があった。

というのも1年生の段階で既に天竜は頭角を現しており、この学校で彼を知らないものはいないのだ。

「モンスターをセット。カードを伏せて、ターンエンド」

闇夜 LP:8000 モンスター(伏せ)1 伏せ1 手札4枚

「俺のターン、ドロー！」

天竜は自分の手札を見る。

ライコウにソーラーエクステンジ、ウォルフ、死者蘇生、ケルビム、死者転生か・・・

「俺は手札からソーラーエンジを発動。手札のライトロード・ビースト ウォルフを墓地に捨てて、デッキからカードを2枚ドロウ。その後デッキからカードを墓地に送る！」

そして・・・

来た。

早速、裁きの龍が・・・。

だが、今このクラスで使うわけには行かないな・・・。

「デッキから墓地に送ったカードの中にウォルフが含まれていた。よって攻撃表示で特殊召喚だ」

「・・・チェインしないよ。続けて」

「メイン1終了。バトルフェイズだ！行け、ウォルフで攻撃だ！」
本当はここでケルビムも出せたのだが、様子見だ。

「・・・君が攻撃したモンスターはこのカードだよ。ヴェルズ・フレイス」

黒き鳥獣をウォルフが引き裂く。

「・・・リバーズ効果を発動するよ。相手フィールド上の表側表示のカードを1枚手札に戻すんだ」

「くそ・・・俺はウォルフを戻すぜ」

こんなことならケルビムで行けばよかつたなと軽く後悔する天竜。

「バトルフェイズ終了。メイン2。俺はモンスターを1枚セットして、ターンエンドだ」

天竜 LP8000 モンスター（セット） 伏せ無し 手札5枚

「僕のターン・・・ドロ」

静かにカードを引き、手札に加える。

「永続罨カード、侵略の浸喰感染を発動するよ・・・」

侵略の浸喰感染

永続罨

1ターンに1度、自分の手札または自分フィールド上に表側表示で存在する

「ヴェルズ」と名のついたモンスター1体をデッキに戻して発動する。

自分のデッキから「ヴェルズ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「へえ・・・見たこと無いカードだな」

天竜は県内の大会に何度も出たことがあるが、闇夜が使うカード群は見た事が無かった。

興味深げに、闇夜の戦術とカードを観察する天竜。

クラス中も興味津々といった雰囲気だ。

「僕は手札のヴェルズ・オランタをデッキに戻してヴェルズと名のついたモンスター1体を手札に加えるよ……。ヴェルズ・ザッハークを手札に加えて、召喚するね」

ヴェルズ・ザッハーク

効果モンスター

星4 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻1850 / 守 850

フィールド上に表側表示で存在する

このカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上の特殊召喚されたモンスター1体を選択して破壊する。

攻撃力1850・また中途半端な数字だな。

「そして手札から魔法カード、ヴェルズの邪念感染を発動」

ヴェルズの邪念感染

魔法カード

フィールド上に「ヴェルズ」と名のついたモンスターが存在する場合に発動する事が出来る。

相手フィールド上のカード1枚を破壊する

「僕は君のセットモンスターを破壊するよ・・・」

「くそ」

ライコウが効果を発揮することなく葬られる。

「ヴェルズ・ザツハークでプレイヤーを直接攻撃するね」

天竜：LP8000 6150

「何も伏せずにターンエンドだよ」

闇夜 LP8000 ヴェルズ・ザツハーク 侵略の侵食感染 手札4

「俺のターン、ドロー・・・俺はライトロード・パラディン ジェインを召喚。バトルフェイズだ。ジェインでヴェルズ・ザツハークを攻撃。相手モンスターを攻撃する場合、ジェインの攻撃力は300ポイントアップする」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力1800 2100

ジェインの剣がザツハークを一刀両断してしまった。

闇夜LP：8000 7750

「メイン2でカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

天竜：LP6150　ライトロード・パラディン　ジェイン　伏せ
1枚　手札4枚

「エンドフェイズ。ジェインの効果でデッキの上からカードを2枚墓地に送る」

目ぼしいカードが落ちねえか。

まあいい・・・さあてどう来る。

《天竜。あの闇夜という少年の操る、「ヴェルズ」・・・何か違和感を感じる》

その時ジェインが俺の耳元で耳打ちする。

「・・・どういうことだ？」

《あのモンスター達から心を感じないのよ、天竜》

手札のケルビムが警戒するような目を闇夜の・・・手札に向ける。

《まあ私達とコンタクトを取れないだけで、精霊は宿っているようだが・・・》

ジェインの歯切れがどうも悪い。

ケルビムも・・・いやデッキのライトロード達全員が感じているようだ。

だが、確信が無くそれ以上の発言は控えているのだろう。

「僕のターン。ドロ・・・侵略の侵食感染の効果を発動。手札のヴェルズ・フレイスをデッキに戻して、ヴェルズ・カイトスをサーチするね」

そうか・・・キーカードはあの「侵略の侵食感染」って言う永続罫か。

毎ターン必要に応じてサーチできるんだな。

「ヴェルズ・カイトスを召喚。カイトスの効果。このカードをリリースすることで相手フィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊する。僕は君の場の1枚を破壊」

ヴェルズ・カイトス

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 水族 / 攻1750 / 守1050

このカードをリリースして発動する。

相手フィールド上に存在する魔法・罫カード1枚を選択して破壊する

砕け散ったのは次元幽閉だ。

「メインフェイズ2にカードを1枚伏せて、ターンエンド」

闇夜 モンスター無し 侵略の侵食感染 伏せ1 手札3枚

「俺のターン、ドロー」

闇夜のフィールドには壁となるモンスターはいない。

一気に決める

「俺は手札から愚かな埋葬を発動。その効果でデッキからライトロード・ビースト ウォルフを墓地に送る。そして、墓地から直接墓地に送られたことでウォルフを特殊召喚する」

おろかな埋葬

通常魔法（制限カード）

自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。

「・・・続けて」

チェーンは無し、か。

「そして俺はライトロード・パラディン ジェインをリリースし、ライトロード・エンジェル ケルビムをアドバンス召喚する！」

ライトロード・エンジェル ケルビム

効果モンスター

星5 / 光属性 / 天使族 / 攻2300 / 守 200

このカードが「ライトロード」と名のついたモンスターを生け贄にして生け贄召喚に成功した時、

デッキの上からカードを4枚墓地に送る事で

相手フィールド上のカードを2枚まで破壊する。

ケルビムは俺のデッキの切り札の1つ。

攻撃力こそ上級モンスターとしては低いけど、2枚の破壊効果は攻撃力のハンデを補って余りある。

グラゴニスとコイツでクラスや大会でのデュエルは勝って来たんだ。

まあ俺のデッキには母さんから譲り受けた伝説の戦士も眠っているしな。

「ライトロード・エンジェル ケルビムの効果を発動。ライトロードをリリースして召喚した場合、デッキの上から4枚墓地に送ることで相手フィールド上のカードを2枚破壊する」

1、2、3、4と・・・

お、ルミナスが落ちたか。

よし、これで布陣は揃った。

伏せていたのは聖なるバリア、ミラーフォースか

成る程な。コイツで迎撃しようとしていたんだろっが・・・甘いぜ。

「侵略の侵食感染が破壊されちゃった」

「さらに俺は手札から魔法カード死者蘇生を使う。蘇れ、ライトロード・

サモナー ルミナス」

《私に任せな、天竜。一気に畳み掛けてやるよ!》

「1ターンに1度手札を1枚墓地に捨てて、効果を発動する。墓地のレベル4以下のライトロード1体を蘇生させる・・・シャイニングサモン」

ルミナスの蘇生術で、墓地からウォルフが蘇生する。

俺の場にはウォルフ2体とルミナス、ケルビムが揃った。

「4体でダイレクトアタックだ」

闇夜は黙って総攻撃をまともに受けた。

闇夜LP 7750 250

天竜の与えた7500のダメージにクラス中が湧き上がる。

「これは勝負あったわね」

「ああ・・・テンの奴ちつとは手加減せえって話やけどな」

デュエルを冷静に見守る静香と、苦笑する武虎。

だがクラスメート達の予想とは裏腹に天竜の気分は晴れていなかった。

今確かに自分が押している。

だが・・・

無意識に手札の裁きの龍のカードを指でなぞっていた。

不安なのだ。

何かがおかしい、そう感じずには居られない。

フィールドには4体の相棒達がいる。

いつもなら、勝利を確信している場面なのに。

「俺はこれでターンエンドだ。エンドフェイズ、ルミナスの効果でデッキからカードを3枚墓地に送る」

天竜LP：6150 ケルビム ルミナス ウォルフ2 伏せ無し
手札1枚

闇夜LP：250 モンスター無し 伏せ無し 手札3枚

「僕のターン。ドロー……」

ドローカードを見て、手札に目を移動させる。

そしてそのまま天竜のフィールドを見た。

「……君の切り札はどうやらライトロード・エンジェル ケルビムのようなね」

「ああ」

嘘はついていない。ケルビム“も”切り札であるというだけだ。

「……でもまだあるんでしょ。切り札。ケルビムだけじゃなさそうだね」

「……さあな」

こいつ、まさか。

知っているのか？俺のデッキに……『裁きの龍』が存在している事を。

「……天竜君。君の名前は僕の前の学校でも聞いた事があるんだ。偶然にね。光に終結したモンスター達、そして混沌から生まれし戦士を使うと」

「開闢の使者のことか。ああ、そうさ。母さんから継いだ大切なカードだ」

といつても裁きの龍程の希少価値は無い。

だから開闢の存在は知られても構わない。

というか大会で使いまくってたしな。

ま・・・禁止になった時はどうしようかと思ったが。

「・・・まだデッキに眠っているのかな・・・」

独り言のように呟くと、手札を再び凝視する。

「・・・僕はモンスターをセットして、ターンエンド」

闇夜LP：250 モンスター1（セット） 伏せ無し 手札3枚

「俺のターン、ドロー。このターンで終わらせる。行け、ケルビム

！セットされたモンスターを攻撃だ！」

「君が倒したモンスターはヴェルズ・ウォールだよ・・・」

ヴェルズ・ウォール

悪魔族 / 星3 / 攻 1050 / DEF 2050

このカードが墓地に送られた時、このターンのバトルフェイズを終了させる。

その後お互いのプレイヤーはデッキからモンスターカードを1枚選択し、公開した後手札に加える。
ただし「ヴェルズ・ウォール」は選択できない。

「このバトルフェイズは終了し、お互いにデッキからモンスターカードを1枚選んで手札に加えるんだ。僕はヴェルズ・マンドラゴを手札に加えるよ。・・さあ、天竜君も選んで」

「お互いにモンスターをサーチするカードか」

どうする・・・ここはもう1枚のケルビムで行くか・・。

いや、開闢で一気に押し切るか・・。どうせ闇夜のライフは残り僅かだ。

「俺はカオスソルジャー開闢の使者を手札に加える」

お互いに手札に加えたカードを提示し合う。

「俺はこれでターン終了だ」

天竜：LP6150 ケルビム ルミナス ウォルフ2 伏せ無し
手札3枚

エンドフェイズにルミナスの効果でデッキから2枚墓地に捨てられる。

特に目ぼしいカードは無い。

ネクロ・ガードナーも俺の優勢で、使わないだろうし・・・。

「僕のターンだね。僕はカードを1枚伏せて、モンスターをセット。ターンエンド」

闇夜：LP250 モンスター1（セット） 伏せ1枚 手札2枚

「俺のターン、ドロー」

・・・今日の俺はどうやら絶好調みたいだな。

「手札から速攻魔法サイクロンを発動する。その伏せカードを破壊だ！」

「・・・チエーンするよ。罠カード、威嚇する咆哮を使う。このターンの君は攻撃宣言を行えない」

威嚇する咆哮

通常罠

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

「くそ、なら俺は手札からカオスソルジャー 開闢の使者 を墓地のライトロード・ハンターライコウとネクロ・ガードナーをそれぞれゲームから除外し、特殊召喚する。現れる光と闇の狭間より生まれし、混沌の戦士！」

混沌の戦士の登場が今クラス中をざわめかせる。

カオス・ソルジャー 開闢の使者

効果モンスター（制限カード）

星8 / 光属性 / 戦士族 / 攻3000 / 守2500

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを1体ずつゲームから除外して特殊召喚する。

自分のターンに1度だけ、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。

フィールド上に存在するモンスター1体をゲームから除外する。

この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

「開闢の使者の効果を発動。裏側守備表示モンスターをゲームから除外する」

ヴェルズ・フェイスは為す術無く異空間に除外されてしまった。

「闇夜、今のはプレミスやなあ。威嚇する咆哮あるならモンスターセットする必要なかったやん。どうせヴェルズ・ウォールの効果で手札に開闢があるの分かったのに、痛いミスやで」

「そうね・・・まあどちらにしても結果に影響は出ないでしょうけど」

《我が主よ、私が馳せ参じたからには、この戦いの勝利を約束致しますよ》

天竜の前に深々と跪く開闢の使者。

・・相変わらず堅苦しい奴だ。

《ケツ相変わらず芝居がかってんな。言っとくけどよ、この戦いの戦況をここまで有利にしたのは俺達の手柄だ。その辺分かってんのか》

ウォルフが開闢に突っかかる。

対してふふんと鼻を鳴らして、冷やかな目をウォルフに向ける力オスソルジャー。

《貴様等、手札に来たらコストにしかならんくせによく言うな。この戦いにおけるケルビム達の奮闘は認めるが、貴様はただの筋肉馬鹿だろう？私の召喚コストぐらいにしかならんくせに、あまり軽薄な口を叩かんほうがいいぞ》

《ああ！なんだと、こっちが優しく言ってるやいい気に為りやがって！お前なんてついこの間まで禁止だっただろうが！》

《それはそれだけ私が戦果を上げてきたということだ。手札コストは黙っていてくれるか？なんならこの場でゲームから除外してやってもいいんだぞ？》

《上等だ！ぶっ潰してやる！》

「・・・俺はこれでターンエンドだ」

喧嘩を始めてしまったウォルフと開闢の使者になにやら頭痛を感じつつ、エンド宣言をする天竜。

ルミナスとケルビムは呆れたような表情で行方を見守っている。

天竜：LP6150 ルミナス ケルビム ウォルフ2 カオスソ
ルジャー開闢の使者 伏せ無し 手札2

どう来るかな・・・まあもう手は残されて無いだろうけど。

《あの少年、確か転校生だったな。見たことも無いモンスター達を使うようだが・・・》

ウォルフをあっさり伸した開闢の使者がケルビム達に話しかける。

攻撃力と能力とレアリティの差だろう。

《ええ、ヴェルズってモンスター達を使う子よ。あまり強くないけれど》

《にしてもアイツの作戦が読めないな。常に受身って言うか・・・何かを待ってるようで不気味よね》

男勝りのルミナスも不安そうだ。

「僕のターン。ドロー・・・天竜君」

消えそうな声で突然話しかけられたため、少し天竜はたじろいでしまふ。

「な、何だよ」

「僕は君の切り札が出るのを待っていたんだ」

その一言に天竜のモンスター達に加えクラス内が騒然とする。

「待っていた・・・？」

「うん。僕は手札からヴェルズ・マンドラゴを特殊召喚。この子はね、君の場のモンスターより僕のモンスター数が少ないときに特殊召喚できるんだ」

ヴェルズ・マンドラゴ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 植物族 / 攻1550 / 守1450

相手フィールド上に存在するモンスターの数が

自分フィールド上に存在するモンスターより多い場合、

このカードは手札から特殊召喚することができる。

なかなか可愛らしい植物族モンスターが現れる。

だが目はやはり、他の「ヴェルズ」モンスターと一緒に死んでいる・・・。

というか目に感情が無く不気味だ。可愛らしい外見がさらに不気味さを増大させているようにも思える。

「そして僕は手札からヴェルズ・オランタを通常召喚」

ヴェルズ・オランタ

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 炎族 / 攻1650 / 守1250

このカードをリリースして発動する。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

2体のヴェルズ・モンスターが並んだ・

《・・・我が主、来ます。恐らくは彼の切り札が》

開闢の使者が肩越しに呟く。

天竜の体も自然と緊張し、身構える。

「僕はレベル4、ヴェルズ・マンドラゴとヴェルズ・オランタをオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚。・・・ヴェルズ・バハムート」

漆黒のドラゴンが、フィールドに呼び出される。

青く美しいクリスタルのボディと漆黒の外殻が、威圧感を醸し出している。

《闇夜。こいつらが俺の贄か？なかなか上玉ぞろいだ・・・》

ヴェルズ・バハムート

エクシーズ・効果モンスター

ランク4 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2350 / 守1350

「ヴェルズ」と名のついたレベル4モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事が出来る。

手札から「ヴェルズ」と名のついたモンスター1体を捨てて、選択した相手モンスターのコントロールを得る。

「・・・効果を発動するよ。バハムートのエクシーズ素材を取り除いて、手札から「ヴェルズ」モンスター1体を捨てることで、君の場のモンスターのコントロールを得るね」

「な・・・永続的なコントロール奪取だと!？」

天竜は自分が、闇夜の事を甘く見ていた事を悟った。

今から思えば闇夜は防戦一方だったのではない、ずっと耐えて待っていたのだ。

自分が切り札を召喚するその時を。

「これが・・・狙いか・・・」

「・・・僕は、カオスソルジャー開闢の使者を選択。手札のヴェルズ・コアトルを墓地に捨てて、コントロールを得る。闇の囁き、ダークウィスパール」

開闢の使者の体が硬直する。

《我が主ツ・・・！》

どうやら意思はそのまま、支配権を奪うらしい。

《へへへ・・・これで貴様は俺の奴隷人形だ》

卑下な笑みを浮かべ、バハムートが開闢の使者に触れる。

《いいねえ・・・貴様のような高尚な奴の意思を踏みにじって支配してやるのはよお》

いきなり邪悪さ全開のバハムートは、どうやら先程の「ヴェルズ」達とは格が違うようで、意思疎通は可能らしい。

まあ、性格的に疎通したくも無いタイプだが。

「バハムート、あまり調子に乗ると失敗するから程々にね・・・」
闇夜は消え入るような音量でたしなめた後、バトルフェイズに移行する。

「ヴェルズ・バハムートでライトロード・サモナルミナスを攻撃」
バハムートの放つ攻撃がルミナスを葬った。

天竜：LP6150 4800

「ぐ・・・」

「さらに、カオスソルジャー開闢の使者の2回攻撃の効果を選択。
ウォルフ2体に攻撃」

天竜：LP4800 3000

「バトルフェイズ終了、メイン2には何もしない。ターンエンドだよ。そしてこのエンドフェイズに墓地のヴェルズ・コアトルの効果が発動するよ・・・墓地よりコアトルを回収・・・。ターンエンド」

ヴェルズ・コアトルの攻撃力は0だが、その能力は禁止カード「キラ・スネーク」を彷彿とさせる強力な効果だ。

ヴェルズ・コアトル

星2 / 闇属性 / 爬虫類族 / 攻0 / 守250

このカードが墓地に存在する時、自分のエンドフェイズに発動する事が出来る。

このカードを手札に戻す事が出来る。

この効果は自分の墓地とフィールドに合計4体以上の「ヴェルズ」と名のついたモンスターが存在している場合のみ発動する事が出来る。

「ヴェルズ・コアトル」の効果は1ターンに1度しか発動できない。

闇夜：LP250 ヴェルズ・バハムート（ORU1） カオスソルジャー開闢の使者 手札1

（甘かった・・・）

ライフこそ闇夜を凌駕しているが、一気に形勢が逆転してしまった。

（思えば俺の手札に開闢が居るのにモンスターをセットしたのは、プレミスでもなんでもなかったんだ。俺に開闢を召喚させるため・・・切り札を奪うためだったんだ！）

天竜は拳を握り締めた。

自分は今見事に闇夜の策略に嵌まったのだ。

（自分が恥ずかしいぜ・・・防御ばっかしている闇夜を・・・俺はいつの間にか見くびっていたんだ・・・それがアイツの作戦だとも知らずに・・・くそっ！自分を蹴っ飛ばしてやりたい・・・）

「俺のターン、ドロー」

俺の手札には・・・裁きの龍がいる・・・。

本来ならばコイツを出して、効果を起動してダイレクトアタックをすれば・・・いや

墓地を確認する。

ルミナス、ウォルフ、ジェイン・・・いや駄目だ。

ライコウを除外したから1体足りない・・・いや、待てよ。

このバトルフェイズにケルビムを戦闘破壊させて墓地に送れば合計4種類になる。

そうすればメイン2に裁きの龍を出せる。

闇夜の手札はヴェルズ・コアトル1枚。逆転される可能性は極めて薄い……。

だが……駄目だ、裁きの龍……コイツを皆に見られるわけには行かない……。

今引いた2枚目のライコウを伏せる。

これが最善なんだ……。

「俺はモンスターをセットして、ターンエンド」

そのエンド宣言にケルビムと開闢の使者が驚いたように顔を上げる。

天竜の手札に裁きの龍がいることは分かっているのだから。

天竜LP3000 モンスター（セット） 伏せ無し 手札1

「僕のターンだね。ドロ……僕の読みが正しければ、その伏せはライコウかな」

読まれている。

最早笑えてくる状況だ。

「僕はオーバーレイユニットを1つ外して、効果を発動。ライトロード・エンジェルケルビムのコントロールを得る」

《天竜っ・・・!》

ケルビムと開闢の使者。

二つの切り札を奪われた。

「・・・僕はヴェルズ・バハムートでセットされたモンスターを攻撃するよ」

リバースモンスターはライトロード・ハンターライコウ。

リバースした瞬間相手フィールド上のカードを1枚破壊するカードだ。

「なんで・・・開闢の除外効果を使わない・・・」

《それはなあ、貴様に選んでもらうためなんだよ！俺は既に攻撃を終わっているが、貴様の大切なお仲間の攻撃がまだ残ってるんだぜ。さあて、どっちを破壊するんだ？ま、いずれにせよ仲間を葬ることになるんだがなあ》

「・・・君の絆の強さ、見せてもらおうと思ってね・・・天竜君」

このターン、闇夜は勝っていたはずだった。

開闢の攻撃を放棄して、セットされたモンスターを除外すれば、バハムートとケルビムの攻撃で勝利は確かなものだったのだ。

だが、勝利よりも闇夜は天竜とモンスター達の絆を見たかった。

彼が楽しそうにモンスター達と会話している。

それを闇夜は静かに見ていたのだ。

自分の「ヴェルズ」達とでは不可能なその関係を。

「・・・俺がライコウの破壊対象に選ぶのは・・・」

セオリー通りに行けば闇夜は除外効果を使い、攻撃をすべきだった。

そしてセオリー通りに行くなら、天竜は開闢の使者を破壊対象に選ぶべきだ。

そうすればライフは残る。

だが、本当にセオリー通りに行くなら前のターンに既に裁きの龍を出しておくべきなのだ。

（決まってる・・・前のターンに勝てた俺が“こだわり”を持って勝たなかった。同じように闇夜も絆を見たいつつ好奇心のために勝利を不確かなものにした。なら、答えは一つだ！）

「仲間は絶対捨てない！俺が破壊するのは、ヴェノム・バハムート！お前だ！」

《仲間を秤にかけ、苦悩する奴の姿は最高・・・っえ？俺？》

《我が主・・・》

《天竜・・・》

3体のモンスターの内1体はポカンとし、2体は感動している。

《はあ！？馬鹿じゃねーの！何で俺を・・・》

「先ずはそのムカつく減らず口を閉じさせてやる、ライコウ！やれ！」

叫び声と共に、バハムートは闇夜の墓地に送られてしまった。

「・・・開闢の使者でプレイヤーを直接攻撃」

天竜：LP30000

クラス内はシン・・・と静まり返っていた。

大きな息をつくとき、天竜は自分のイスにドサツと座り込む。

デュエルディスクを外し、デッキを机に置いた。

「天竜君。このカードを君に返すよ」

開闢の使者とケルビムを天竜の机に置く闇夜。

「ああ・・・サンキュ」

「・・・君とモンスターの絆。本物みたいだね・・・」

「お前もあの性悪ドラゴンとよく付き合ってたな」

「ヴェルズ・バハムートの事かい？彼は・・・あれでも僕のパートナーだからね・・・良い所もあるんだよ・・・理解されにくいだけで・・・」

いや、ねえだろ。

心の奥でキツパリと断言する天竜なのであった。

その日のデュエル実習の時間の間、闇夜はずっと黙っていた。

天竜に勝ったことで、彼の知名度は一気に向上したが、闇夜は我関せずといった風に本を読んだり、外を眺めていたりしているだけだった。

そして4時間目、体育の時間だ。

今日は学生達の多くが嫌うマラソンである。

勉強やデュエルをするにも先ず体力から、ということとで体育も勿論必須科目としてばっちり存在する。

校庭を円周するという単純ながらも苦痛の多いマラソン。

先頭を走るのは体力満タンの武虎だ。

天竜も体育もまあまあ得意であるため、トラの背後でペース良く走っていた。

そして列の最後尾には無表情のままマラソンをしている闇夜の姿が。

体育苦手なんだな……。

そう思いながら走っていると、武虎がスピードを落として天竜の横に並んだ。

「1時間目の実習の話やけどな……」

「ああ、それか……」

そろそろ来るだろうなと思っていたが……やはり来たか。

「自分、あのラストターンの前、既に裁きの龍手札に在ったんちゃうん？」

「……相変わらず勘がいいな」

「あのカードが大事なものちゅうことは知つとる。でも何時までも隠し続けられるわけちゃうやろ。いつか、皆に分かるで。それとも自分、この先ずっと隠し続けるつもりなんか？」

武虎の目は何時に無く真剣だ。

「……トラが何を言いたいのかは分かる。でも、まだ……決心がつかないんだ……万が一の事があれば……俺は……」

「……自分の気持ちはよう分かるけどな。最近全国でレアカード関係の物騒な事件も起こつとるし。でも、何時までも隠しとるのは、『裁きの龍』にとつても辛いことやで。まあ、それは自分が一番よく分かつとると思うんやけど」

「・・・」

天竜は黙っていた。

精霊にとっても辛い、か・・・。

「・・・重い話振って悪かったわ。すまへんな」

黙っていたのを、傷つけたと勘違いしたのか、武虎が俯く。

「いや、いいんだ」

暫らく黙って走っていたが、武虎が口を開いた。

「闇夜、強かったで。序盤から中盤の防戦は全部作戦やったんやな・
・・・恐ろしい奴や」

「ああ。俺も油断してたよ。切り札をわざと引かせて、油断させ、
一気に戦力を奪う。奇襲性に富んだ見事な策略だ」

この日から、天竜達はデュエルモンスターズ界を震撼させる事件に
巻き込まれていくことになる。

その事をまだ天竜達は知らない

第3話 天竜の後輩登場、その名は雄介〜カードショップ『白兔』にて〜

学校の帰り道、天竜は必ず立ち寄り寄る所がある。

帰宅途中の道にあるカードショップ『白兔』だ。

「おーす」

「お、天竜。いらっしやい」

顔なじみの店長が片手を上げて迎えてくれる。

決して広いとはいえないデュエルスペースしか無い中規模の店だが、店長の顔の広さと品揃えの豊富さから、この辺りでは知らないものは居ない店だ。

「今日はデュエル実習で見事に負けたそうじゃないか」

「う・・・」

既に噂は伝わっていた。

流石店長・・・情報が早いというか、地獄耳というか・・・。

「まったく公認大会でも上位に食い込むお前さんが・・・で、お前さんを負かしたその少年はどんなデツキだった？」

苦笑いの表情で、デュエルスペースのイスに腰をかけると今日あった事を洗いざらい話した。

暫らく店長は黙って聞いて、時々相打ちを打っていたが、最後の方でふう、とため息をつく。

「成る程。その闇夜という少年は見たことも無いモンスター達を使っていたと」

「ああ。俺も色んな大会に出ているけど、始めてみた」

「『ヴェルズ』モンスター、俺聞いたことがありますよ」

その時、カードショップ『白兔』の常連で、天竜の後輩に当たる、篠原雄介だ。

同じ中学に1年違いで通っており、弟分に当たる存在と言える。

通称ユウスケ。

中学プレイヤーの中でかなりの実力を持ち、天竜も何度も負けている。

その実力は並みのデュエリストを遙かに凌ぎ、強豪中学生プレイヤーとしてデュエル雑誌に載ったこともある。

これからが期待できる新星エースだ。

「ユウスケが？マジかよ」

「はい。俺が前大会に遠征に行った時に、会場のフリーのデュエルスペースで、1度だけ・・・と言っても遠くから見ただけですけ

ど」

「精霊達・・・他のカードに宿っているものと違うだろ」

その言葉に、雄介の顔が曇る。

「ええ。なんか意思疎通が出来ないというか心が無いというか・・・異色でしたね。ただ、ヴェルズ・・・えっと・・・バハムートだったっけ・・・そのモンスターとはコンタクト可能でしたけど」

そうか、ユウスケも俺と同じなのか。

「話を聞く限り、かなり珍しいモンスター達のようなのだが、かなり不気味だな」

「うっすっ」

その時自動ドアが開き、色黒の高校生、武虎が入ってきた。

「お、トラ。お前部活は？」

「今日は練習ないから、店に来たんや」

鞆をドサツと机の上に置くと、雄介の肩に手を回す。

「お、ユウスケ、暫らく見ない内に大きくなったなあ」

「・・・3日前に会ったばかりでしょ・・・」

「3日は短いようで長いでえ。なんせ72時間や」

「はいはい、分かりましたから。離れてください」

雄介が武虎の腕を外すと、ため息をついて席を移動する。

「なんや、ノリ悪いな。自分がそんな冷たい子やとは知らへんかったで」

「トラさんが悪乗りしすぎなんです」

「それで、どうやら話題は・・・闇夜の事やな？」

武虎も椅子に腰をかけ、デッキを弄りつつ口を開けた。

「ああ。というかなんり早かったけどな、この話題がこの店に伝わるの」

「まあ、天竜さんの高校とかなり距離が近いですからね」

悪い噂は伝わるのが早いのは知っていたが・・・と苦笑する天竜。

「それにしても、ヴェルズモンスターか・・・」

机に肘をつき、天竜は静かに考えをめぐらす。

「あの異質な感じ、ただの精霊達じゃなさそうだな」

「そうやなあ・・・俺思ったんやけど、あのヴェルズモンスターには何か秘密があると思うんや。例えば、そうやな・・・精霊界で何かあったみたいな感じで」

「精霊界・・・」

デュエルモンスターのカードに宿る精霊達の世界。

その異世界の存在は知られてこそいるが、そこに行く手段はまだ見つかっていない。

世界中の研究者が今も血道を上げて研究に取り組んでいるが、未だに異世界への道は不明のままだ。

「精霊界か、是非とも行ってみたいが・・・」

そう言いつつ、天竜はデッキを撫でる。

「俺もや。相棒達の住む世界やる。行きたいもんやでえ」

確か歴史の授業でやってたな。

つい20年前までは、精霊界の存在どころか、デュエルモンスターの精霊の存在すら知られていなかったって・・・。

一部の能力を持ったデュエリストが精霊との接触が出来ていただけらしいけど・・・。

「でも確か、精霊界に行く方法はまだ発見されてないんですけどよね」

「それにしても不思議やなあ。精霊達は今ここに居るのに、その世界に行けへんのおかしいやろ」

「それはね、精霊達は実体がないけど、僕達人間は肉体を持つから一方通行になっちゃうんだよ……」

武虎の耳元で消え入るような声が聞こえる。

「のあああ!?!」

文字通り飛び上がる武虎。

そしてそのまま椅子から転げ落ちてしまった。

武虎の背後から現れたのは、そう転校生の芝罫夜だ。

相変わらず声は小さく、存在感が薄い。

そのくせオーラはある。

相変わらずのゴーストっぷりだ。

「な!?!アンヤ・お前何時からいたんだよ!?!」

「……さつきから居ただけ。帰り道に少し立ち寄っただけ……」

「

そう……なのか。

全く気が付かなかった。

まったく……心臓に悪い。

「ホント自分は幽霊みたいな奴やなあ・・・驚かせるなや！心臓止まるやる！」

頭を摩りながら、武虎が不機嫌そうに立ち上がる。

「じめん・・・」

霧の彼方から聞こえるような謝罪の言葉に、武虎は悟った。

闇夜は自分が最も苦手とするタイプの人間であるということ。

「いや、謝られても・・・あゝ！もう、ホンマ自分苦手や！」

短い髪をグシャグシャと掻き回し、ドサツと椅子に座りなおす。

「僕、何か悪いことしたかな・・・」

「いや、ええんや！自分悪くあらへんから！気にせえへんといて！気にされると俺が堪えるわ！」

顔を無表情のまま覗き込んでくる闇夜に、武虎は苦い顔をした。

「あ、もしかして」

微妙な雰囲気になりつつある中、雄介が思い出したように声を上げた。

「天竜さんを倒した、芝闇夜さんですか？」

「・・・そうだけど。何か僕に用？」

「いやあ俺達の憧れの天竜さんを破ったとくれば、用は一つですよ」
雄介の顔が綻びつつ、一瞬だが野心の心が瞳に過る。

「俺とデュエルしてください」

中学生クラスのトッププレイヤー、篠原雄介。

天竜に僅差でいつも負けている彼にとっては願っても無いチャンスだと判断したのだろう。

何せ天竜を負かした相手を、自分が倒すことが出来れば雄介の密かな野心にも一歩迫れるというものだ。

天竜と武虎は顔を見合わせる。

いつもは礼儀正しく良き後輩である雄介だが、デュエルになった瞬間内に秘めたる野心がむき出しになる。

まあそれは店の常連ならだれもが知っている彼の長所であり短所でもあるのだが……。

「……デュエルね。いいよ……でも、僕は今ディスクをもっていないんだ……」

「ああ、大丈夫です。こここの机は簡易版デュエルリングになってますから」

そう言つて、雄介は100円を机の下のコイン投入口にチャリン、と入れる。

すると、プレイマットが自動で収納され下からソリッドヴィジョン
投影機が顔を表す。

「・・・すごいね」

「さて、デュエルですよ！」

「・・・うん」

雄介と闇夜のテンションの差に店長は苦笑を浮かべつつ、戦いの始
まりを見守っている。

「さあ、お先にどうぞ」

「じゃあ遠慮なく・・・ドロ。メイン1でモンスターをセット。カ
ードを1枚伏せて、ターンエンド・・・」

闇夜 LP8000 モンスター1（セット） 伏せ1 手札4

「俺のターン、ドロ。俺は手札から魔法カード、おろかな埋葬を
発動。デッキからモンスター1体を墓地に送る。グローアップバル
ブを墓地に送りますよ」

グローアップ・バルブ

チューナー（効果モンスター）

星1/地属性/植物族/攻 100/守 100

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、

墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事が

できる。

「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「・・・続けて」

「そして俺は手札抹殺を発動、互いに手札のカードを入れ替えます」

闇夜と雄介は4枚ずつを総入れ替えする。

「そして手札からカラクリ小町 貳貳四を通常召喚します」

カラクリ小町 貳貳四

チューナー（効果モンスター）

星3 / 地属性 / 機械族 / 攻 0 / 守 1900

このカードは攻撃可能な場合には攻撃しなければならない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、

このカードの表示形式を変更する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、

自分のメインフェイズ時に1度だけ、

自分は通常召喚に加えて「カラクリ」と名のついたモンスター1体を召喚する事ができる

「あ、この展開は・・・」

雄介は一見、「カラクリ」デッキの使い手のようにも見えらるだろう。

だが天竜達は知っている。

彼の愛する、切り札かつ相棒の切り札がこのターンで下手をすると出てくることを。

「オレは小町の効果で手札からこのターンもう一体のカラクリを呼ぶことが出来ます。来い、カラクリ忍者 九吉九！」

カラクリ忍者 九吉九

効果モンスター

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻1700 / 守1500

このカードは攻撃可能な場合には攻撃しなければならない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、

このカードの表示形式を変更する。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地に存在するレベル4以下の「カラクリ」と名のついたモンスター1体を選択して表側守備表示で特殊召喚する。

「チューナーと非チューナー・・・」

「俺はレベル4カラクリ忍者九吉九にレベル3のカラクリ小町をチューニング！シンクロ召喚、出てこい！カラクリ將軍 無零！」

カラクリ將軍 無零

シンクロ・効果モンスター

星7 / 地属性 / 機械族 / 攻2600 / 守1900

チューナー+チューナー以外の機械族モンスター1体以上

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

自分のデッキから「カラクリ」と名のついたモンスター1体を

特殊召喚する事ができる。

1ターンに1度、フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、表示形式を変更する事ができる。

「こいつのシンクロ召喚に成功したとき、デッキからカラクリ1体を持ってこれます。俺はデッキからカラクリ守衛 参叁参を特殊召喚します！」

カラクリ守衛 参叁参

チューナー（効果モンスター）

星4 / 地属性 / 機械族 / 攻 600 / 守1800

このカードは攻撃可能な場合には攻撃しなければならない。

フィールド上に表側表示で存在するこのカードが攻撃対象に選択された時、

このカードの表示形式を変更する。

このカードの戦闘によって自分が戦闘ダメージを受けた時、

自分フィールド上に表側表示で存在する「カラクリ」と名のついた全てのモンスターの

攻撃力・守備力は、エンドフェイズ時まで800ポイントアップする。

また、このカードはフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り戦闘では破壊されない

「おっ初っ端から流れに乗ってきてるやん」

武虎の言葉通り、雄介は絶好調だった。

いつも以上にデッキが回る。

（もう少しだ。お前も暴れたいだろ・・・だからちょっとまってくれよ）

「そして俺は墓地のレベル・ステイラーの効果発動。あ、さつき手札抹殺で墓地に送っていたんです。無零のレベルを7 6にして、レベル・ステイラーを蘇生します！」

カラクリ將軍 無零 レベル7 6

レベル・ステイラー

効果モンスター

星1/闇属性/昆虫族/攻 600/守 0

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

「・・・」

闇夜は黙って見守っているだけだ。

「レベル1のレベル・ステイラーにレベル4カラクリ守衛をチュ

ーニング！シンクロ召喚！来い、TGハイパー・ライブラリアン！」

TGハイパー・ライブラリアン

シンクロ・効果モンスター（制限カード）

星5/闇属性/魔法使い族/攻2400/守1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在し、

自分または相手がシンクロ召喚に成功した時、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「そしてカラクリ將軍無零のレベルを6から5に変化させ、レベル・ステイラーを蘇生！」

無零 レベル6 5

再びレベル・ステイラーが地中より蘇った。

「さらに、墓地のグローアップ・バルブを蘇生！」

デュエル中1度しか使用できないが、完全な自己再生能力をもつ強力なチューナー・・・それがグローアップ・バルブだ。

雄介お気に入りのカードの1枚でもある。

「そして、レベル1のレベル・ステイラーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ召喚！希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン！」

フォーミュラ・シンクロン

シンクロ・チューナー（効果モンスター）（制限カード）

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻 200 / 守 1500

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する

このカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

「フォーミュラ・シンクロンの効果で1枚、そしてハイパー・ライブラリアンの効果で1枚、計2枚ドローします」

「成程・・・君はあのカードを出すつもりだね。なら、フォーミュラ・シンクロンの特殊召喚時に罠カード、威嚇する咆哮を発動させてもらうね。このターン、君は攻撃できない」

「問題ないですよ、それぐらい」

いや、むしろ、気がかりだった伏せが無くなって良かった。

これで一気に加速できる！

「レベル5となったカラクリ将軍 無零とTGハイパー・ライブリアンにレベル2、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！アケセルシンクロ！輝け！光の竜よ！闇を照らしだし、悪を滅せ！現れる！チューニング・クエーサー・ドラゴン！」

シューティング・クエーサー・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4000 / 守4000

シンクロモンスターのチューナー1体 + チューナー以外のシンクロモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードはこのカードのシンクロ素材とした

チューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。

このカードがフィールド上から離れた時、

「シューティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

《雄介、待ちくたびれたぞ！祭りの始まりだ！さあ、我に潰される哀れな生贄はどこにいる！》

「まだ2ターン目なんだけどな・・・それとクエーサー、このターン攻撃できないからな」

神々しい光と共に、現れたシューティング・クエーサー・ドラゴンに店内が騒然とする。

このモンスターこそ、雄介の切り札だ。

親が数年前に買ってくれた宝ものらしく以来、雄介はこのカードを出すためのデッキを研究している。

「俺が素材としたチューナー以外のモンスターはハイパーライブラリアンと無零の2体。よって通常の攻撃に加えて2回まで攻撃できるようになります。まあこのターン攻撃宣言を行うことは出来ませんから、メイン2に移行しますね」

手札にカウンター罫は生憎無かった。

《さあ我に攻撃させる！》

「待つてよ、クエーサー。威嚇する咆哮でこのターン攻撃できないつてさつき言っただろ。大体今日の前でメインフェイズ2に移行しただろ？」

《・・・そうだったか？》

・・・シューティング・クエーサー・ドラゴンは何時も自信満々であり、誇り高く、実力もあり、そして人の話を聞かないし聞いていない。

どこかの元キングのような性格だ。

悪いやつではないが、会話があまり成立しない。

そんな精霊とコミュニケーションが成立するのはひとえに長年の付き合い合いの賜物だと雄介は確信している。

「俺はこれでターンエンドです」

雄介LP8000 手札4 シューティング・クエーサー・ドラゴン（3回攻撃可能） 伏せ無し

闇夜LP8000 手札4 モンスター（セット） 伏せ無し

「やっぱり雄介はすごいわ。後行1ターンでクエーサー出しよった」

武虎に心の中で同意しつつ、天竜はチラッと闇夜を見る。

普通1ターンでこいつを出されたら動揺するんだけどな。

アンヤ・・・こいつ表情が全く変わってない。

・・・気をつけるよ、雄介。

こいつのデュエルは全てが罠だ。

観戦している観客や店長が雄介の勝利を確信するなか、天竜は一人何とも言えない不安に襲われていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3074y/>

遊戯王 チェンジ・パラダイム～地平を越えて～

2011年11月9日01時07分発行